

知的障害特別支援学校での柔道授業の試み

松川博茂*・村松利之**・右高和生***・村松常司****

I. はじめに

平成20年に学習指導要領の改定¹⁾が行われ、平成24年度から中学校において武道が必修となった。それに伴って、特別支援学校においても、武道を保健体育授業の一環として行うことができるようになった。特別支援学習指導要領解説総則等編²⁾では、武道に関しては「生徒の実態に応じて、相撲等適宜取り扱うこと」とされており、相撲が例示されている。その結果、愛知県内の知的障害特別支援学校中学部の武道においては、相撲が比較的多く取り上げられており、柔道を取り入れている学校は限られている。これは柔道経験のある指導者(有段者)が少ないためと思われる。柔道³⁾は日本で生まれたスポーツであり、体力の向上だけでなく、礼儀作法、日本文化の観点からも特性があり、全世界に親しまれているスポーツと言ってもよい。

生徒の特性や障害を考慮した上で個に応じた指導方法が確立できれば、特別支援学校においても柔道の指導を行うことができる。近年、特別支援学校で柔道を導入した実践報告^{4) 5) 6)}が散見できるようになった。それによると、①相手と直接組み合うことによって対人意識が向上する、②勝ち負けがはっきりしているので理解しやすい、③緊張感を感じるようになる、④柔道衣を持って相手を投げることから相手への気遣い行動が見られる、⑤着替え、帯を結ぶことができるようになり、日常生活に繋がる行動ができるようになる、⑥安全意識が高まる、などのいくつかの効果が報告されている。

特別支援学校学習指導要領解説総則等編²⁾においては、中学部の保健体育科の意義は「中学部の保健体育科では、小学部の段階の基礎の上に立ち、自己の運動技能・体力に応じた適切な運動の経験や健康・安全についての理解を通して、健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、明るく豊かな生活を営む態度を育てることを目標としていることが特徴である。特に、運動を実践していくことは、運動技能を高めるばかりでなく、生活への積極的な態度も養い、望ましい人間関係の形成を促すことになる。また、体育指導によって身に付いた力は、健康・安全で自律的な生活を営む習慣形成の確立につながっていくものである」と示されており、特別支援学校の生徒にとって体育学習は極めて重要と言える。

愛知県内20校1,027名(平成27年5月1日現在)の知的障害特別支援学校中学部の障害の種類をみると約4割が自閉症であり割合としては高い⁷⁾。自閉症の代表的な特徴⁸⁾は次の3つ、①社会性の障害(相手との関わり方がうまくできない)、②コミュニケーションの障害(相手との意思疎通がうまくできないため言葉を適切に用いることが困難である)、③言語・行動のこだわり(想像力を働かせて遊ぶことが苦手で、特定の事柄に興味に限られてしまったり、特定のやり方にこだわったりする)が指摘されている。以上のことを踏まえて、著者らは知的障害特別支援学校中学部の保健体育授業に平成12年から柔道を取り入れている。

本研究ではその実践を概観する^{9) 10)}。

* 愛知県立大府特別支援学校教頭、** 享栄高等学校副校長、*** 東海学園大学客員教授、

**** 東海学園大学スポーツ健康科学部教授・学部長

Ⅱ. 研究方法

(1) 授業のねらい

生徒の様子を観察すると、授業の開始・終了時には挨拶ができていても日常生活ではできないことが多い。これは、挨拶が習慣化されていないためと考えられる。また、障害や運動・生活経験の不足のため歩行が不安定で転びやすく、転んだときに身を守ることができずけがをする生徒が見られる。そこで、運動の楽しさや技能向上の喜びを感じさせるとともに、挨拶の方法や自らの身を守る技術を身につけさせるスポーツとして体育の中に柔道を取り上げた。

柔道は礼儀（礼に始まって礼に終わる）を重んじ、相手を抑えたり、技をかけて投げたりする中で、相手へのいたわりの気持が育まれるスポーツであるとされている。今日では、男女を問わず健康の保持増進、危険から身を守るスポーツとして広く実践されている。本校のような知的障害特別支援学校でも興味をもっている生徒がいるので体育の年間指導計画に柔道を組み入れ、以下の3つのねらいに基づいた授業を展開している。

ねらい①：柔道に関する基礎的技術を身につける。

ねらい②：相手を尊重するとともに健康と安全に留意できるようになる。

ねらい③：基礎体力の増進を図り、安全に対する態度や能力を高める。

(2) 指導内容・方法

指導に当たって、まず、障害の特性を踏まえた指導として以下の①～③を配慮した。

配慮①：柔道授業の場を自覚させる。

- ・畳、等身大の柔道衣を着た人形（通称：ねわざ君）、嘉納治五郎先生の写真（A2版大）などを毎回用意した。
- ・1枚の畳ごとに番号と生徒の名前を付けた。

配慮②：柔道の授業の全体の流れを知る。

- ・毎時間、授業の初めにスケジュール表を提示して「見通し」をもたせた。
- ・スケジュール表の中に授業の流れと終了を示すことで、メリハリを付けた。

配慮③：授業の理解を容易にする工夫をする。

- ・両袖と襟に色布（青・赤）をつけた柔道衣を用意し、技の説明の理解を図った。
- ・礼法、受け身や技の絵カードを用意することで、集中力の向上を図った。

以上を共通した配慮事項としながら、以下の1)～3)の内容を指導した。

1) 《心》の指導（着替えと礼法の指導）

①着替えの指導

襟の合わせや帯の締め方など日本古来の和の服装様式を経験をさせるには良い機会であるため、時間をとって一人で着替え、帯を締めることができるようにした。授業では、イラストを使って柔道衣の着方を指導し、着替えをゲーム化にしてスムーズな着替え方を習得させた。

②礼法の指導

授業の開始と終了時は正座して礼（座礼）を行う。練習時の開始と終了では立礼を行う。ただ礼をするだけでなく、相手を尊重する気持ちをもって礼をするよう指導した。

2) 《技》の指導（受け身と技の指導）

①受け身の指導

仰臥の姿勢（ぎょうが 仰向けに寝た姿勢）→長座の姿勢（ちょうざ 足を伸ばして座った姿勢）→蹲踞の姿勢（そんきょ しゃがんだ姿勢）→立ち姿勢→後ろ受け身→横受け身→前回り受け身へと、受け身の姿勢と種類を順次増した。それぞれの姿勢の「絵カード」を示すことで分りやすくした。生徒の興味・関心を高めるために受け身をゲーム化して行った。生徒にはゲームを通して受け身を理解できるようにした。

②固め技（抑え込み技）の指導

安全面に配慮して抑え込み技を先に取り上げた。抑え込み技は、まず、生徒が要領を得るまでは、抑え込む生徒、抑え込まれる生徒と役割を決めて行わせた。次の段階では簡易ルールによるゲームや約束練習を行って技の応用を習得させた。

抑え込み技の基本技として「けさ固め」を取り上げ指導した。「等身大の人形」（通称：ねわざ君）を活用するなどの工夫を行った。

③投げ技の指導

投げ技の練習では、あらかじめ投げる生徒と投げられる生徒を決めることで、スムーズに技の習得をさせた。また、段階指導として、膝車は投げられる生徒がひざをついた姿勢で行い、お互いに慣れてきたところで立ち姿勢を行った。技としては初心者が習得しやすく、受け身も取りやすいことから、膝車、大内刈り、大腰の三つを指導した。

④簡易ゲーム

抑え込み技で抑えた状態から、教師の合図とともに抑え込みをしている生徒はそのままの姿勢を維持しようとする。抑えられている生徒は、相手を返したり、足をかけたりして抑え込み技を解くゲームを行わせた。

- ・背中を合わせた長座の姿勢から抑え込み技に入るゲーム。
- ・ひざをついて向かい合わせの姿勢から抑え込み技に入るゲーム。

3) <体>の指導（準備運動と補強運動の指導）

①補強運動の指導

投げ技、抑え込み技がうまくできるようになるには準備運動や補強運動が大切であることを指導した。

②受け身の指導

仰向けの姿勢の受け身から高い姿勢の受け身へと段階を追って練習させた。また、毎時間繰り返し受け身を行うことで、柔道の授業に限らず日常生活の中で、つまづいて転んだ時に受け身ができるように指導した。畳を叩くタイミングをタンバリン、笛を使って分かりやすく行った。

Ⅲ. 結 果

(1) 生徒の変容

体育の授業に柔道を導入した後、生徒に次の1)～4)に挙げる変化が見られた。

1) 「見通し」をもてるようになった。

授業の始まりから終わりまでの内容を記した「スケジュール表」（写真1）を作成したことで、次第に指導者の話に耳を傾けるようになった。また、「受け身」「けさ固め」など、その日に行う内容を口ずさむようになり、活動への「見通し」がもてるようになった。

2) 着替えと挨拶の学習効果が上がった。

柔道衣の左右の襟に赤と青の色テープを貼ることで、着替えの内容が分りやすくなり、指導の回を重ねるごとに柔道衣の着方、帯の結び方が上手になってきた。これは知的障害の指導のまず一歩である。身辺自立を進める上で、洋服の着替えから更に和服の着替えの経験をする機会となり、着替えの幅が広がっていると言える。

また、礼法にも重点を置き、分りやすいように「絵カード」で示して、毎時間、授業の始めと終わりの挨拶（礼）や説明をする際に、正座の姿勢（写真2）をとるようにした。その後は、指導者の話を聞くようになり、離席する生徒が減った。

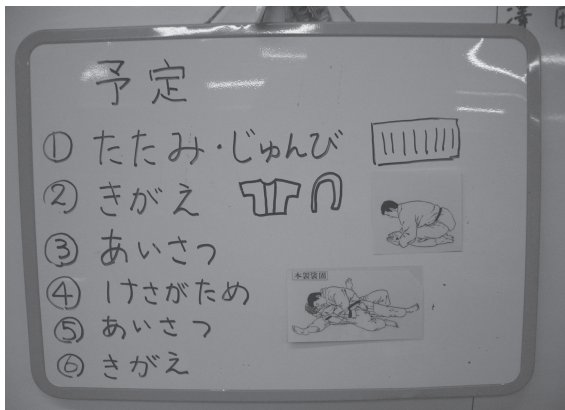


写真 1：スケジュール表



写真 2：正座の姿勢

3) 安全面の向上とともに自主的な動きが発現した。

後ろ受け身や前受け身の最大のねらいは、頭部を守る技術であるが、まだ頭をつけてしまう生徒がいる。そこで、掛声とともにタンバリンを使用することでタイミングよく、畳を叩くようになり、練習の中でタイミングよく両腕を畳にたたいて衝撃を吸収し、頭部を守る生徒が増えた（写真 3）。

自閉症の生徒は、対人関係やコミュニケーション面に課題を抱えているため、相手と組みたがらない場面があった。そこで、初めに、等身大の人形を使ったり、絵カードを見せてイメージ化を図ることで立ち技での組手や固め技においてぎこちない面が見られるものの、「見通し」が得られるにつれて、自主的に相手と組み、技をかけようとする場面が増えた（写真 4）。



写真 3：受け身



写真 4：けさ固め

4) 柔道に関する意欲・関心が出た。

着替えゲーム、受け身選手権、先生と寝技ゲームなど簡易ルールでゲームを行うことで、積極的に授業に参加でき、関心が高まり、指導者に「先生、今日の柔道、楽しかった」「柔道衣を一人でたためるようになったよ」とか「また、柔道がやりたい」といった素朴な発言から「先生、抑え込まれたときの返し方を教えて」といった技の習得希望まで、幅広い意見が出た。そのためか、進んで畳やマットの準備（写真 5）や後片づけができるようになるなど、柔道への関心が高まり、精神面（心）、技術面（技）、体力面（体）の向上に効果が期待できた。ゲームの判定を他の生徒が「○×」カードを使用して分りやすく行うことで、ルールに関心を持ち、自然に応援する生徒が見られ、ゲームをやる生徒、見る生徒ともに主体的な姿勢が見られた。

(2) オリンピックメダリストの講演と実技指導

ソウルオリンピック銅メダリストの山口香氏とバルセロナオリンピック銀メダリストの溝口紀子氏を学校に招く機会に恵まれた。山口香さんの講演は、柔道をはじめとしたスポーツ全般に関する興味を高めることを目的として計画されたものであり、生徒たちはメダリストたちによる華麗で迫力のある投げ技を見たり、対戦（稽古）したり、メダルに触れたことでより一層柔道に対する関心が高まったと思われる（写真6）。

また、保護者もオリンピックメダリストの講演と実技指導を参観したことによって、柔道そのものや柔道指導に対する理解が深まったと思われる。知的障害特別支援学校に在籍する生徒は、抽象的なことからは理解が難しく「見通し」が持ちにくいいため、日ごろから、より具体的なものを指導の中に取り入れる工夫をしているが、今回のようなオリンピックメダリストとの交流を通して、本物との出会いがより一層、柔道への興味関心を高めることにつながったと考えられる。

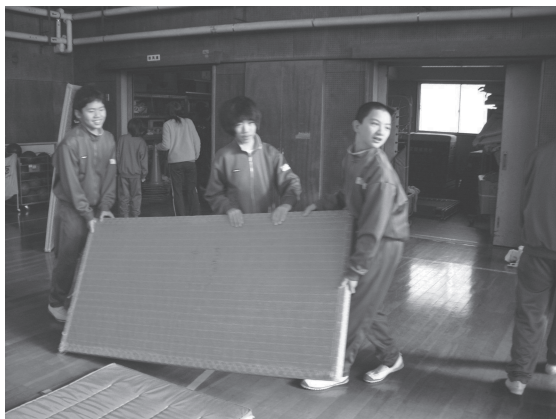


写真 5：畳の準備



写真 6：山口香氏の講演

IV. 考 察

特別支援学校における授業効果の評価は、授業を受けた生徒達の聞き取り調査からの判断は難しいことから、指導者の振り返りに頼ったことを明記しておきたい。

特別支援学校で実技の授業を行う場合、生徒の特性を把握しておくことは必須であり、安全配慮することはもとより、生徒たちの理解を容易にする工夫も重要である。今回の柔道授業を進めるうえで、次の4点を重点的に配慮し、その結果が得られた。

- 1) 柔道衣の着方や帯の結び方を指導した。→柔道衣の着方や帯の結び方を覚えた。
- 2) 挨拶（礼）を指導した。→自分から挨拶（礼）ができるようになった。
- 3) 受け身を指導した。→受け身を覚えて安全に転ぶことができるようになった。
- 4) 相手と組み合うことを指導した。→人に触れ合うことに慣れた。

加えて、「スケジュール表」を毎時間作成することによって、授業の順を視覚的に示し、「見通し」を持つことができるようになった等の向上点もみられた。特別支援学校における教育の中では「視覚的」と「見通し」の配慮は極めて重要である。また、自閉症の生徒は相手とうまく関わるることができないことが多く、柔道で相手と組む身体接触の経験は成長や発達の面から重要と考える。

帰りの会（ホームルーム）で、「今日の保健体育の授業は何をやりましたか」の質問に対して、自閉症の診断を受けたAさんから「柔道」「受け身」「寝技」などの言葉が出た。また、保護者からは「家でも嬉しそうに柔道の話をしてくれました」という連絡を受け、Aさんが柔道の授業を受け、言葉の発現や親とのコミュニケーションの進歩がみられたことが分かった。

本報告は一事例にすぎないが、今後も安全に、効果的に柔道授業を進めるためには授業内容を含めいくつかの課題があげられる。肥後ら⁵⁾は、特別支援学校における柔道を取り入れた事例報告の中で、「柔道において安全性を確保する一つは受け身の習得である。受け身は、技を受けて道場に倒れる際に身体に伝わる衝撃を抑える役目をしている。柔道は技によっても人によっても相手を倒す方向や強さが異なり、特に、初心者同士の場合は更なる危険性が潜んでいるので、いろんな場面での受け身の習得は必須である。中でも前回り受け身の習得は重要である。特別支援学校の生徒を対象にして柔道を指導する場合は、安全面、学習状況、個人の適応度など様々な面から判断しなければならない」と指摘している。前回り受け身はいわゆる柔道特有の受け身と言ってもよく、うまくできるようになると、さらに柔道も楽しくなることが予想される。中学校学習指導要領¹⁾の柔道の技能には、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本的な技ができるようにすることが示されており、特別支援学校の柔道指導にも当てはまる。

都立青島特別支援学校では、すでに昭和34年から柔道を教科として保健体育で実施しており、その報告¹¹⁾によると、①多動傾向の生徒に協調行動がみられるようになった、②ダウン症の生徒の身体コントロールに変化がみられた、④自閉傾向生徒に「気遣い」行動が見られるようになった、⑤柔道を楽しむに授業に参加するようになった、⑥着替え、帯がうまく結べるようになった、などいくつかの効果が示されている。

柔道の指導は少し経験したぐらいでは指導しにくいスポーツである。柔道高段者でも十分な安全管理と配慮をしないと、内田¹²⁾の指摘する大きな柔道事故が起こる可能性がある。特別支援学校の生徒であるなら更なる配慮・工夫が必要である。体育授業に柔道を導入するときには、指導者の熟達の程度をできる限り上げることが大切と考える。できない場合は、柔道高段者(T1)と他の教員(T2)の複数で授業を行うことを勧めたい。知的機能に制約がある生徒や適応行動に制約を伴う生徒の柔道指導から得られた知見(配慮や安全への工夫)は特別支援教育の枠を超えた柔道指導の基礎になり得ると考える。

次に、生徒の実態に合わせた指導方法、内容や教材、教具の開発が重要である。今回も自閉症の生徒達には、スケジュール表を作成することで授業時間の「見通し」を持たせること、袖、襟に色テープを付けたり、技の絵カードを示す、すなわち見て直ぐ分かる教材を作ることが効果的であることが分かった。

最後に、施設・用具の面では、畳や柔道衣が必須であり、より一層の整備、充実が必要となる。安全な授業を行うために十分な畳、柔道衣は確保したい。畳や柔道衣がない場合は、近隣の中学校、高等学校への声かけ(寄付)も良いと思われる。

本論文の巻末に特別支援学校中学部における柔道授業指導例1、指導例2を示した。参考になれば幸いである。

V. まとめと課題

本研究は知的障害特別支援学校における柔道授業を安全に効果的に行うために、いくつかの試みを導入した結果、以下のような知見を得ることができた。

- (1) 授業の開始時、終了時及び練習の始めと終わりに適切な挨拶ができるようになった。
- (2) 授業内容の順序を「視覚的」に示し、「見通し」を持たせることで指導者の話に耳を傾けるようになった。
- (3) 柔道衣に工夫を加えることによって、着衣、帯結び、柔道衣の片付けなどができるようになった。
- (4) 身体接触を伴う授業内容を実施できた。
- (5) 柔道に関する意欲や関心が生まれ、自主的な動きが発現した。

また、今回の結果を踏まえて、よりよい柔道授業を行うためには以下に示す課題が考えられる。

- (1) 柔道の指導は経験者にも指導しにくい技術指導の面があるが、若い指導者の育成とともに指導法の教授資料の作成が求められる。
- (2) 知的障害特別支援学校の生徒の実態に合わせ、特に自閉症の生徒への指導に対する指導方法、内容や教材の開発が必要である。
- (3) 施設・用具としては、畳、マットや柔道衣が必要であり、より一層の整備の充実が望まれる。
- (4) 生徒による授業評価には難しさがあるものの、生徒が表現できる内容や方法を工夫して評価をさせる必要がある。

VI. 知的障害特別支援学校中学部での柔道授業例

1. 対象学年 中学部第 3 学年 6 名
2. 実 態 自閉症児 3 名、知的障害児 2 名、ダウン症児 1 名の計 6 名。
簡単な指示は理解し、簡単な動きを真似することができる。
運動制限はなし。
3. 指導者 2 名の指導者 (T1、T2) によるチーム・ティーチング
4. 指導形態 器械運動と選択制授業
 - (1) 柔道に関する基礎知識や所作を身につける。
 - (2) 柔道の基礎的な技術を身につけるとともに基礎体力の向上を図る。
 - (3) 畳の準備や後片付けを行い安全に授業に参加する態度を身につける。
5. 指導・評価計画【総時間数 10 時間】

時間数	単元名及び学習活動	評価規準
2 時間	・柔道の名前を覚える。 ・礼法を覚える。 【オリエンテーション】 【柔道名前当てクイズ】 【礼法コンテスト】	・柔道の試合のビデオを見て、柔道の用語に関心できる。 ・2 名ずつで、どちらが上手に礼法ができるか競争しながら礼法を身につける。
2 時間	・柔道衣に慣れる。 ・柔道衣の着方を知る。 【着替えサーキット運動】 【柔道衣のたたみ方ゲーム】	・ゴムハードル、前転、着替えを入れた運動を取り入れ柔道衣をスムーズに着る技術を身に付ける。 ・柔道衣のたたみ方を知る。 ・柔道衣をたたむ競争を通して早く正確にたたむことを知る。
3 時間	・受け身を覚える。 【受け身選手権】	・色々な受け身を身につける。 ・2 人ずつ受け身を行って、正しい受け身ができていの方を勝ちとするゲームを行う。
3 時間	・抑え込み技を覚える。 (けさ固め) 【抑え込み選手権】	・10 秒 1 本勝ちルールでの寝技の試合を行い、抑え込み技の技術を身につける。

6. 指導例 1

- (1) 題 材 「着替えサーキット運動」
- (2) 本時の目標
 - 1) 正しい柔道衣の着方を覚える。
 - 2) 正しく運動ができるようにする。
 - 3) 畳の準備、後片付けを協力して行うことができるようにする。
- (3) 教材・教具
マット、柔道衣、ゴムハードル、カラーコーン

(4) 指導過程 (40分)

学習活動	指導上の留意点
①準備 ・着替えの済んだ生徒からマットを準備する。 ②挨拶 ・正座をして当番の合図で挨拶をする。 ③準備運動 ・T1 は実際に示して説明する。 ④本時の学習内容 ・本時の学習内容を知る。	・マットの準備ができるようにする。 ・素早く集合できるようにする。 ・体調の悪い生徒がいないか観察する。 ・挨拶が大きな声でできるように促す。 ・T2 は生徒が正しい正座ができるように促す。 ・準備運動を行わせる。 ・T2 は準備運動ができない生徒の補助をする。 ・着替えサーキット運動を指導する。 ・ゴムハードル、前転、着替えについて競争することを指導する。 ・T1 が学習内容を説明をする。
⑤着替えサーキット運動 ・2人ずつで競争する。	・T2 は着替えの補助をする。 ・勝敗をつけることで正しい着方、スムーズな着方を身につけようになる。 ・その都度、勝敗をつけて競い合う。
⑥整理運動 ・使った身体の部位を進展する。 ⑦後片付け ・マットと畳を片付ける。 ⑧まとめ ・本時のまとめをする。 ⑨次時の予告と挨拶 ・次の授業の内容を知る。 ・代表の生徒の合図により挨拶（礼）をする。	・ゆっくりと身体をほぐすようにする。 ・協力して後片付けができるようにする。 ・授業の内容を知り、「見通し」を持てるようにする。 ・姿勢を正して挨拶できるようにする。 ・良いところを褒めて授業のまとめを行う。 ・T2 は姿勢や着替えの補助をする。 ・元気よく挨拶（礼）できるようにする。

(5) 評価

以下の3点から授業評価を行う。

- 1) 正しい柔道衣の着方を覚えたか。 【知識・理解】
- 2) 礼儀正しく安全に運動することができたか。 【技能、思考・判断】
- 3) 準備、後片付けを協力して行うことができたか。 【関心・意欲・態度】

7. 指導例 2

(1) 題材 「抑え込みを覚えよう」

(2) 本時の目標

- 1) 正しいけさ固めができるようにする。
- 2) 正しく運動ができるようにする。
- 3) 畳の準備、後片付けを協力して行うことができるようにする。

(3) 教材・教具

マット、畳、柔道衣、移動黒板

(4) 指導過程 (40分)

学習活動	指導上の留意点
①準備 ・着替え、準備 ②挨拶 ・正座して当番の合図で挨拶（礼）をする。 ③準備運動 ・T1 は実際に示して説明する。 ④本時の学習内容 ・本時の学習内容を知る。	・マット、畳の準備ができるようにする。 ・素早く集合できるようにする。 ・体調が悪い生徒がいないか観察する。 ・挨拶が大きな声でできるように促す。 ・T2 は、正しい正座ができるように促す。 ・準備運動を行わせる。 ・T2 は準備運動ができない生徒の補助をする。 ・けさ固めを指導する。
⑤抑え込み技（けさ固め） ・抑え込む生徒、受ける生徒を決めて、けさ 固めを行う。 ・10 秒間抑え込みをする。 ・代表者による抑え込みゲーム	・抑えるポイントを指導する。 腰→相手の右脇に右腰を入れる。 腕→左腕で相手の右腕を抱え込む。 ・T1 が抑え込みを示して説明する。 ・10 秒間抑え込む。 ・体格差がないようにグループ分けをする。 ・教師を注目するように言葉がけをする。
⑥本時のまとめをする。 ⑦次時の予告と挨拶（礼） ・次の授業の内容を知る。 ・代表の生徒の合図により挨拶（礼）をする。	・良いところを褒めて授業のまとめを行う。 ・次の授業の内容を知り、「見通し」を立てる。 ・T2 は姿勢を正す補助をする。 ・元気よく挨拶（礼）できるようにする。

(5) 評価

以下の 3 点から授業評価を行う。

- | | |
|-----------------------------|------------|
| 1) 正しいけさ固めをすることができたか。 | 【知識・理解】 |
| 2) 正しく運動することができたか。 | 【技能、思考・判断】 |
| 3) 畳の準備、後片付けを協力して行うことができたか。 | 【関心・意欲・態度】 |

付記

本研究で用いた写真の掲載については特別支援学校の承諾を得ていることを銘記する。

VII. 参考文献

- 1) 文部科学省 (2008) : 中学校学習指導要領解説, 保健体育編, 武道, 99-117, 東山書房, 京都
- 2) 文部科学省 (2009) : 特別支援学校学指導要領解説総則等編 (幼稚部・小学部・中学部), 349-353, 教育出版, 東京
- 3) 真田久 (2014) : 嘉納治五郎の考えた国民体育、現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか (日本体育協会監修・菊幸一編著), 83-106, ミネルヴァ書房、京都
- 4) 曾根裕二 (2011) : みんなで取り組む柔道, 知的障害特別支援学校での一実践, リハビリテーションスポーツ, 30(1)、58-59
- 5) 肥後梨恵子, 角杉昌幸, 中島たかし (2012) : 特別支援学校における武道教育 (柔道) の事例報告, 都立 S 区 S 特別支援学校の取り組みについて, 国士舘大学武徳紀要, 第 28 号, 45-52
- 6) 加部務 (2013) : 柔道、受け身を身に付け安全に試合をしよう, 前回り受け身を体感しよう, 障害のある子どものための体育・保健体育 (大南英明, 他監修), 160-165, 東洋館出版社, 東京
- 7) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2016) : 特別支援教育資料, 33
- 8) 藤岡宏 (2009) : 自閉症の特性理解と支援, 45-52、66-88, ぶどう社, 東京
- 9) 松川博茂 (2001) : 知的障害養護学校における柔道指導の導入, 全国高等学校体育連盟柔道部創立

50年誌, 60-65

- 10) 松川博茂 (2008) : 楽しい柔道の授業, 特別支援教育に役立つ実践事例集 (是枝喜代治編著), 36-40, 学研, 東京
- 11) 都立青鳥特別支援学校保健体育科 (2012) : 知的障害特別支援学校における保健体育科単元学習「柔道」のねらい, 公開授業研究会「柔道納め」資料
- 12) 内田良 (2013) : 柔道事故の実態と特徴, 柔道事故, 20-57, 河出書房新社, 東京